

教育学習支援センター紀要の発刊にあたって

甲南大学 教育学習支援センター 所長 井上 明

10年前、「アクティブ・ラーニング」という言葉を聞くことはほとんどなかった。今や高等教育のみならず初等・中等教育を含め、アクティブ・ラーニングという言葉が溢れている。

ただ、最近、「アクティブ・ラーニングはバズ・ワードである」ということも耳にする。バズ・ワードとは「一見説得力があるように聞こえるが、実際には具体性が無くよくわからない言葉」である。おそらく多くの教師がこのような状態ではないだろうか。

アクティブ・ラーニングとは単に、グループワークやプレゼンテーションをすることではない。図書館で一人貪るように本を読むことも、アクティブ・ラーニングである。つまり、知的好奇心に突き動かされ、自らの意思で様々な知識を吸収し、考え、形にする行動そのものがアクティブ・ラーニングの本質である。寝食を忘れ、単位や試験のためでなく、学ぶことそれ自体が楽しみに思えるようにするためには、授業というもののあり方を再構築する時期に来ているのではないか。

学生のほとんどがスマートフォンを持ち、インターネットに日常的につながっている時代である。教え方や学び方も変わるのは必然であろう。これまで学校におけるパソコンは「教具」として、いかに同じような環境を整え、一斉に利用することばかりが考えられてきた。しかし、現代では、パソコンやスマートフォンを、鉛筆、消しゴムといった「文具」と同じものにとらえ、それらを使って「何をどのように学ぶのか」が問われている。

ある高校では、この春から授業で生徒が自分のスマートフォンを使って学習ができる予定である。学習者がより学びに興味を持ち、積極的に学ぶための道具としてICTを活用する。学生のノートや教科書、教師が利用するホワイトボードやペンがインターネットに繋がればどのような新しい学びが実現できるのかを考え、アクティブ・ラーニングなどをより効果的に実践する。そのような新しい学びの形態を私は「IoE(Internet of Education)」と呼ぶ。

ICTを活用した教育やアクティブ・ラーニングを効果的に実践するための「型」を作る必要がある。アクティブ・ラーニングやプロジェクト型学習を単なるバズ・ワードで終わらせてはならない。それぞれの教師が実践している個々の教育の成果やノウハウを蓄積し共有する。それらを体系化することで、新しい学びの型が作られていき、本学のみならず我が国の教育の発展に繋がっていくのである。

この紀要に多くの成果が集まり、さらなる教育・学習の発展に寄与するものとなるよう強く望んでいる。